町民文芸

只見短歌会　十一月詠草

大塚栄一　指導

山の栗豊かに実りしこの秋は熊も喜び食みてをらむか　小倉キミ子

列車より窓越しに見る晩秋の駅に髪揺れ女佇む　関谷登美子

霧晴れし畑に藁塚積み終へて主は明るく言葉かけゆく　古川　英子

過疎の地の静かな祭りに門付けの神楽の太鼓の音が聞こゆる　渡部ゆき子

来年も花見る楽しみ思ひつつ庭のダリアの球根掘りぬ　馬場　八智

丈に合ふ細木集めるに骨折りて石南花の多き蕾を囲ふ　目黒　富子

忘れゐし水道水を止めくれて女医の向けたる笑顔美し　五十嵐夏美

ゆとりなく子らを育てて来し我も幼き孫は叱ることなし　渡部ヨリ子

数千の鉢植ゑ未だ店員ら囲はぬうちに早も雪降る　新国　洋子

（出　詠　順）

只見俳句会　十二月例会

目黒十一　指導

初雪や新聞コトリと配られて　洋子

雪祭花火明滅する夜空　敦子

白鳥の姿も見えず只見川　礼

朝時雨愛車手放す日となりぬ　吉児

漬物樽増ゆるや納屋の冬めける　隆堂

お知らせに耳傾ける雪情報　一灯

浜の子に元気を出せと木の実独楽　邦夫

南瓜煮る香りひろがる冬至かな　リウコ

綻びは手縫いの針目冬浅し　又壱歩

浅草岳頂上に雪神迎う　笑羊

吹雪く日のノックの音や人声も　邦男

佇める地蔵菩薩の肩に雪　恒夫

海のもの釣られて買いし師走かな　信

爺婆の守りきし村初日さす　老兵の夜の白みけり河豚汁

大根引き小雨にぬれて冬支度　枯枝に毛並黄として貂睦む

分校に集いて秋の演奏会　只見湖の刃金光や冬ざるる

只見湖の句碑に降り継ぐ萩の雨

かさこそと落葉引きずる野良ねずみ

あでやかにダムに映りし粧う山

生涯を峡に生き来て冬紅葉

冬の菊小暗き部屋に安堵せり

白鳥のふるさと誇る足輪かな

水鳥や橋の工事の命綱

ふところの隅々までも秋の雨　都

ところいも不ぞろい有りて陽を浴びる　一穂

明日には霜を降ろすか銀河系

落葉して山の神社の現われり　康女

手の平につらの雫うけてみる